

の事もよく見ている。

また、一人の教師が多くの教科を教えるよりも、それぞれに専門の授業をしたほうがよい面もあるのではないかと思う。これは子どもが多くの大人と接する事にもつながる。さらに、特殊学級を受け持つのが一般の教師という事にも限界があると思う。教師は常に手探りの状態にあり、専門の教師が必要であると思う。



金沢市立西小学校教諭
松 村 一 成

子どもと育ちあう地域 ～「天保義民」についての 総合学習の実践をとおして～

1. 天保義民を受け継ぐ

金沢市内にある駅西中央公園に写真①のような碑がある。「天保義民の碑」と書いてある。

——江戸時代
天保の頃、西念
村(現在の金沢市
西念町)などに、

米の見立ての時に、加賀藩の役人が一番取れ高の多い田んぼを見て、それを規準に年貢を決めた。それはひどすぎる、真ん中の田んぼを見てくれと願い出たのに、それはならぬと言って、異議申し立てをした百姓の家族100名以上が五箇山に流された。流された人々は五箇山で10年暮らし、西念村に帰ってきた。その間、流された人々の田んぼ



写真①

地域の大人たちがかかわりながら子どもたちを見守り、教師が子どもたちを育てることに最大限の協力と努力を惜しまない。学校がそのような場所になることを願ってやまない。

注 小黒三郎氏（遊プラン木工細工デザイナー。盲学校勤務時より木工デザインを手がける。

遊プランURL <http://www.u-plan.co.jp/>

や家を村の人たちが守っていた——。

このような出来事が西念村にあった。後の明治時代に「天保義民」と称するようになり、現代まで伝えられている。児童文学作品として『天保の人びと』『五箇山ぐらし』『雪の人くい谷』という三部作を、かつおきんやさんが書いている。

6年生が総合学習で「天保義民」について学習し、劇で表現する取り組みを始めて、今年で6年目になる。

今年も新年度になって早速6年生と話し合った。昨年の6年生は、事件が起きてつかまって、五箇山へ流されるところまで劇にしていた。それで、今年は、その後どうなったのかということについてやりたいと意見が一致して、続「天保義民」をしようということになり、11月29日に向けて、劇をしようということになった。

2. 劇で伝えたいこと

子どもたちは、かつお作品三部作を読み、碑を調べ、分からぬところは、子孫の田中さんや、



写真② かつおきんやさんと子どもたち

作家のかつおきんや先生に話を聞いた。また、かつおきんや先生と一緒に直接五箇山へ行って確かめるなど学びを深めていった(写真②)。

そして、何を劇で伝えたいか話し合った。ここで改めて子どもたちに聞いてみた。「劇で何を伝えたい?」子どもたちは次のように応えた。

- ・五箇山でつらい思いをして帰ってきたことを伝えたい
- ・10年間耐えて生き抜いたことを伝えたい
- ・塩硝作りや蚕、和紙作りなど、苦労やがんばって乗り越えたことを伝えたい
- ・松吉たちの悔しい思いを伝えたい
- ・おばあの死
- ・五箇山の人の楽しさと別れ
- ・西念の人と別れたつらさと再会の喜び
- ・飢饉のつらさ
- ・協力して頑張って過ごしたこと
- ・山奉行の農民支配
- ・チョウハイ(文末注を参照)で帰ったうれしさ
- ・西念の人たちがどんな思いで待っていたか
- ・西念の人の心使いを伝えたい

子どもたちはそれぞれ、学習の過程で心に残ったことを口にした。たくさんの伝えたいことが子どもたちの中に宿っている。さて、それでは、「一番伝えたいことは何なのか。もっと絞ってみよう。」と改めて子供たちに問いかけた。話し合いを通じて次のようにまとまってきた。

- ・生き抜いたことだと思う
- ・どんなことがあっても生き抜いて西念に帰ってきたことだと思う
- ・五箇山の人や西念に残った人たちとの心つながりを伝えたい
- ・たくましさを伝えたい

これらを受けて実行委員の子どもたちがタイトルを決めた。「おらたちは生きぬく」である。委員が他の子どもたちに問いかける。「仲間と助け合いながら、生きぬいてきたたくましさを伝えたからこのタイトルにしました。どうですか。」

満場一致で決まった。

3. どんどん意欲がわく子どもたち

(1) 中学生の出前演劇を見て

毎年恒例の行事として、長田中学校の先輩たちが、長田中演劇発表会の一週間前に「出前演劇」という名で、高学年の子どもたちに見せてくれる行事がある。途中の仕上がりだが、みんなの前で見せてくれるのだ。さすがに中学生はうまい。みんな集中して見ていた。

ある子は次のような感想を書いている。

今日、長田中学校の1~4の人たちが出前演劇に来てくれました。思ったよりあつという間に終わりました。Aさん(昨年「天保義民」の劇で主役をした子)の演技がメチャクチャその役になりきっていて、すごいと思いました。「一つに二つ、二つに三つ」というところがすごく心に残りました。短いせりふでも役になりきっているところがすごいと思いました。私は「天保義民」でこんな風になりきれるかなあと思いました。この劇で私も天保義民を頑張ろうと思いました。

先輩の演劇を「ただ見る」のではなく、これから自分達がやろうとしている劇と重ね合わせて見て学び、先輩に少しでも追いつきたいと一層の意欲をかきたてられていることがわかる。

(2) ポスターや招待状、チケット、チラシ作りを通して

「天保義民」の劇のポスターを貼りに行ったり、それぞれに思いを通して、見てもらいたい人に招待状を送った。作家のかつお先生、子孫の田中さん、天保流れ節を教えてもらった地域の人、過去に天保義民を演じてきた先輩達。保護者、下級生等々の人に…。

かつおきんや先生へ

こないだはお世話になりました。（五箇山へいったとき）

今私たちは「おら達は生きぬく」という劇を練習しています。頑張って役になりきるようにしています。かつおきんや先生に聞いたことや『五箇山ぐらし』、『雪の人ぐい谷』を参考にし、みなさんに感動が伝わるようにみんな一生懸命に練習しています。おばあの死、西念の人に出会うところが見所です。

なので、お世話になったかつおきんや先生にも是非見に来てください。

田中勝義さんへ（子孫の方）

ぼくたちは、ずっと前から西小が続けている天保義民のことを調べたことを劇にすることにしました。そのために事件が起きた五箇山に行って調べたり、本を読んだりして詳しく調べてきました。そして、劇にしました。みんな最初は台本ばかり読んで、演技はありませんでした。けど、本番までにはきっと完成すると思います。田中勝義さんにはいろいろ教えてもらい感謝しています。ぼくたちは頑張ったの是非来てください。

かつお先生からはすぐに返事をいただいた。子どもたちはますます意欲がわいてきたようだ。

りっぱな招待状、どうもありがとうございます。題名も劇も何を言おうとしているかをぴったり表すものになっていて、見に行きたい気持ちがぐっと強くなりました。必ず行きます。さあ、いよいよラストスパート。がんばってください。かつおきんや

4. たくさん的人に見てもらって

演劇を披露する当日は、椅子がなくなる程の600人以上の人たちが見に来てくれて会場がいっぱいになった。下級生をはじめ保護者、先輩達、地域の人たちからたくさんの感想をもらい、子どもたちも満足そうだった。

保護者の感想より

みんなとても上手に演じていて、とても良かったです。素晴らしいです。劇の中の歌も、最後の踊りもとても素晴らしい、あらためて天保義民の踊りへの想いを感じました。こうやって西小の6年生がこの地域に住み、地域の人たちや下級生にこのことを伝えていくことはとても大事だと思いました。この行事がこれからも続くことを願っています。

とても素晴らしいです。涙が出ました。毎年いろんな形で「天保義民」のことを伝えていますが、今年は五箇山での生活をとても詳しく教えてくれてありがとうございます。西小の子どもたちのおかげで、この地域の歴史が分かり、また、この地での生活に誇りと愛着が持てます。

「終わりじゃないよ！俺たちが引き継ぐ！」と言ってくれた下級生の話（6年生の感想文から）

今日はいよいよ本番。5月から天保義民を勉強して、いろいろなことが分かった。西念村の人たちの努力、五箇山での暮らし、松吉達の想いなどを胸に舞台に上がった。最初の拍手はとても驚いた。あんなに大きな拍手は連合音楽会以来だった。こんなにも大勢の人が来てくれたんだといううれし

さと一緒に緊張してきた。そして自分の出番がきた。せりふが終わってもまだ仕事があった。音響、そしておどり、長い時間もとっても短い時間のように感じた。あつという間に終わった。今までの中で一番良いものになった。

その後、私はとっても嬉しい気持ちになった。それは、そうじ場のことだった。5年生としゃべっているとき「天保義民も今日で終わりだなあ」と言ったら、「終わりじゃないよ、来年俺らがやるんやぞ!」と言われた。うれしかった。もう天保義民のことを考えている。改めて劇をやって良かったと思った。いろいろな人が来て、天保義民のことを知ってもらえたし、私たちのめあて「感動させよう」もできたし、とても良い経験をしたと思います。

5. 改めて西念の人たちについて考える

劇を終えたあと、子どもたちと改めて話し合った。「西念の人達はなぜ生き抜けたか」について問いかけた。

——西念の人にとって生きにくいことはどんなことだった？

「米が不作で大飢饉になったこと」

「それが元で米が食べられない」

「厳しい年貢の取り立てで食べられない」

「それに逆らうことができない」

「逆らったら、拷問に合う」

「年貢を減らしてほしいとお願いしただけなのに、

拷問にあったり流刑される」

「土農工商の世界だから、武士に逆らったらこうなった」

「真ん中の田んぼを見てくれって言っただけなのに」

——それで何人流された？

「113名流刑された。」

「流行病で女子どもが死んだ。弱い者からや」

——そうやな、そんな生きにくい世界にいた西念の人達、じゃあ生き抜けたのはなぜかな？

「やっぱり助け合って、協力し合ったからだと思う」

——例えば？

「五箇山へ出発するときとか」

「牢屋で捕まってその前で歌を歌ったとか」

「薬を届けたり」

「チョーハイの時、西念の人達が出迎えてくれた」

「いつ帰ってきててもいいように田んぼを守っていた」

「いつ帰ってきててもいいように朝戸を開け、夕方戸を閉めていた」

——なるほど。他はないかな？

「分かり合いとか心の通じ合いがあったと思う。塩硝作りやカイコをして収穫が増えて、田向かいの人と」

「新しい仲間ができて、罪人扱いしなくて、貴重な体験をした」

「それもあるけれど、強い意志があったと思う。仲間と支え合いながら」

「西念になんとしても帰りたいという強い意志だと思う」

——…に生きようぜということかな？

「分かった、『いっしょに生きようぜ』や」

——じゃあ、なぜ君たちもこんなに頑張れたのかな？

・ 一度やるって決めたから、自分のセリフやり遂げたいと思った…7人

・ 苦しさや仲間との助け合いを伝えて感動を伝えたい…22人

・ 流されてもたくましく生きたことを伝えたい…16人

・ 先輩に追いつきたい気持ち…9人

・ 友だちからのアドバイスに励まされて頑張れた…7人

——そうか、そういう気持ちがあったからか。なるほどそれで頑張れたんだ。

子どもたちは、自分たちが何を伝えたいのかという学習を積み重ねてきた。松吉という自分たちと同じ世代の子どもが主人公で、その視点で世界を見ることができたことで子どもたちにとって取り組みやすかった。伝えるものがあるからこそ、劇に集中することができた。

また、西念の人達が圧政に屈することなくつながり合ってたくましく生きたことを、伝えたいと思ってやっているうちに、子どもたちもつながり合っていったことの学びは大きいと思った。加えて、先輩たちに追いつきたいというつながり合った学びの連續は、次の6年生や後輩に対して「続けてほしい」との願いになっていた。

社会の江戸末期の授業で、安政の泣き一揆などについて学習しているときに、世の中を動かす農民のたくましさを西念の人々などからも学んでいることがあげられ、歴史的にどう位置付いてきたのかを考えていた子どもがいたのは収穫だった。かわいそうという外から見て言う意見でなく、土

農工商の中で、苦しみながらもたくましく生きる姿を子どもたち自身が捉えている。

現代に生きる子どもたちが自分自身とつなげて考え、「今」からこの天保義民を見ることができると、ますます地域からの学びが深まると思っている。

この実践は2年前。そして今、再び6年生の担任になった。子どもたちも今、天保義民を学習している。さあ、子どもたちは何を伝えるためにこの天保義民をしようとしているのか一緒に学び豊かになっていきたいと思っている。今年もポスターを貼りに行ったり、それぞれに思いを通して、見てもらいたい人に招待状を送っている。

注 「チョウハイ」

北陸の方言で、実家に里帰りする際に使用する語（古来、元日に天皇が大極殿で臣下から祝賀を受ける儀式で、律令制下における天皇の重要な儀式とされた「朝拜」が、年末年始の里帰りの意に転用され、後には時期を断定せず使用されるようになった。）。

参考：日置謙『加能郷土辞彙』北國新聞社、1956年。『大辞林』（第二版）三省堂、1995年。



金沢大学教育学部教授
山 本 敏 郎

子育て・教育・学校を語り合う拠点としての地域

1. 学校の外にある〈地域〉、〈地域〉の外にある学校
学校の危機が声高に呼ばれるようになると、必ず地域と学校の連携などというものがまとことしや

かに提唱されます。〈地域〉という言葉の意味はさまざまですが、〈地域〉という言葉の使われ方にいくつかの違和感を感じます。学校の問題に限定してひとつだけ述べてみます。

それは〈地域〉がほぼ学校外や校区と同じような意味でとらえられていることです。大学が地域貢献というときの地域も同じです。学校サイドから〈地域〉を特定すれば、〈地域〉が学校外や校区をさすのは不自然ではないのですが、〈地域〉の側からそう見ている学校を見返してみると、学校は地域の外にあるものということになります。事実はそ